

被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第18号 1999年9月18日(土)

発行 歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)
TEL/FAX 078-803-5565

目次	
広島県における文化財レスキューとその課題	久保隆史... 1
『火垂るの墓』を歩く参加記	三浦正子... 7
『火垂るの墓』を歩く・新聞記事 8
ニュース購読・募金協力のお祝い 1
出版企画 / 『歴史のなかの神戸と平氏』	... 9
公害資料保存活動の報告と今後の展望	達脇明子... 4
文献情報 / 取り組み報告とお知らせ 10
戦争史跡見学・講演会	新聞記事より(震災対策検証作業)..... 11
『火垂るの墓』を歩く	辻川 敦... 6
	NPOシンフォニー「講演と交流の夕べ」... 12
	兵庫津連続市民学習会のお知らせ..... 12

広島県における文化財 レスキューとその課題

久保隆史

本年6月、広島県西部において集中豪雨より倒壊した寺院内より、経典・佛画等を救出する文化財レスキューが取り組まれた。

今回は、鈴峯女子短大の松井輝昭氏の仲介により、ボランティアとしてレスキューに取り組んだ久保隆史氏に、レポートを寄せていただいたので、紹介する。(編集部)

はじめに

私は広島市において、博物館・歴史民俗資料館・県立文書館・社寺や個人蔵の、絵画・資料・古文書など文化財の保存修復に携わっている。

私のささやかな経験からも、たとえ文化財に指定されていなくても、その地方の文化・歴史を次世代に伝える貴重な資料が少なくないことが分かる。先の阪神・淡路大震災を契機に、全

国的にこれらの文化財を災害から守ろうとする機運が高まっている。そして、広島県内でも文化財レスキューのネットワークが是非とも必要と考えていた矢先、本年6月29日の広島県西部の集中豪雨で、佐伯郡大柿町の古寺が被災した。

6月30日の中国新聞はカラー写真付きで、「開基1200年の寺崩壊」と報じた。中国新聞のこの記事によると、全壊した寺は、広島市より、海路25km、陸路40km余り離れた、佐伯郡大柿町の曹洞宗宝持寺(住職:山下義典氏、85歳)であるという。

広島県内にいる文化財保存修復学会会員の伊藤実・福原幸一の両氏に連絡をとり、被災地での文化財救助活動を行うことの賛同を得られた。

(次頁に続く)

“史料ネット News Letter”購読と募金のお願い

史料ネットの活動に、平素からご協力いただき、ありがとうございます。今年度も、歴史学研究会大会をはじめ、学会等の場でご協力をお願いした結果、9月なかばまでに次のとおりニュース購読申し込みと募金協力をいただきました。

募金 53人130,500円 ニュース購読申し込み 81人

引き続き、ご協力をお願いします。“News Letter”は年4回発行、年間購読料(郵送費)500円にて受け付けています。下記支援募金口座に「ニュース郵送購読希望」と明記してお振り込みいただくか、あるいは電話、FAX、e-mailのいずれかの方法で史料ネットセンターまでお申し込みください。

史料ネット活動支援募金 (郵便振替)
名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会 口座番号 01090-7-23009

宝持寺の文化財レスキュー活動

1 文化財レスキューの方針

私がこれまでに修復してきた文化財のなかに、過去の被害等による傷跡が残っているものが多い。また、被害等を受け、現在残っていない文化財・資料の大半は、家屋復旧作業のあいだに、焼却又は廃棄されたと聞かされることが多い。これまでに消滅した未指定の文化財は相当な量になり、そのなかに貴重な文物も多く含まれていたものと推定される。

このようなことから、今度のレスキュー活動は、寺院や家屋の復旧作業を進めるとき、土砂による汚染資料が廃棄焼却されることを防ぐため、復旧初期の段階から救済すべく、住職及び檀家に対して理解を求めた。また、資料の重要性や、保管するための応急処置など、本格的な修復までの手順の説明を行った。そして、文化財・資料レスキューを行うことにした。

2 レスキュー活動の記録

次に、宝持寺のレスキュー活動について、その内容を簡単に述べることにする。

6月30日 大柿町教育委員会と宝持寺住職代理に電話にて連絡を取る。

7月1日 県内在住の文化財修復学会会員（以下の文中では同学会会員を単に「会員」と記す）伊藤実氏、福原幸一氏、鈴峯女子短大の松井輝昭氏とレスキュー活動について協議し、ボランティアの応援を依頼する。

7月3日 被災地に出向き、寺、檀家の総代会に出席。文化財のレスキュー活動の概要を説明、双方の了承を取りつける。伊藤実・福原幸一両氏に報告し、家屋整理作業に併せて、資料等のレスキューを行うことにした。なお、参道の崩壊により寺まで機材等を搬入できないため、参道口の民家に駐車場を確保した。

7月4日 檀家総代の取り組み方針の変更か、ボランティアによるレスキューに不安が出たのか、佛具掘り出しは佛具店に依頼するので、ボランティアの参加を見合わせてほしいとの連絡が入った。

7月12日 伊藤実氏から、県教育委員会文化課を通して、町教育委員会に現状説明とレスキューの実施について連絡した。現地に出向いて、寺側に再度ボランティアによる文化財レスキューの趣旨を説明し、早速取り組むこと

とした。

7月18日 会員伊藤、福原、久保の3名が、現地に入って町教委への連絡。レスキュー活動の趣旨を、住職代理・檀家総代に説明した。佛像・佛画・経典が一部取り出されていたので、その保存状況を確認した。明和元年(1764)製涅槃図など数点については、防カビ処理などの応急処置を施した。このことで寺側も安心したのか、1週間後の日曜日に寺の本格的整理を行うとき、私達が佛画や経典などのレスキュー活動を行うことを了承された。

7月20日 寺より今日、町内有志による家屋整理を行うと連絡を受ける。そのため、寺に出向き、週末に行う経巻・佛画・檀家帳類の処置に備えた。この日は、スレートの屋根と側面をビニールシートで張った仮小屋に板を敷き、その上に経典・佛画・寺院記録・古文書・佛具を置き、木酢酸30%水溶液を散布した。経典・佛画・寺院資料等及び佛像佛具には、エタノールを噴霧した。

7月25日 広島県文化財保存ボランティアグループ（仮称）を構成し、総員21名のボランティアメンバーで、文化財・寺院記録資料の応急処置、救助活動を行った。

3 文化財レスキューの成果と参加者

私達が、この度レスキューした文化財・資料と、応急処置等を施したものは次の通りである。

a. ボランティア参加者

広島県立歴史民俗資料館主任学芸員	伊藤実氏
広島県立文書館研究員	西村晃氏
広島県立高校教員（会員）	福井照道氏
広島大学文学部文化財科教官	安間拓巳氏
	他、学生7名
広島大学理学部化学科教官（会員）	福原幸一氏
広島大学大学院日本史学研究室	藤川誠氏他5名
中国新聞社解説委員	後藤研一氏
広島県薬業(株)防虫害燻蒸技師	下倉一行氏

なお、この度の文化財レスキュー活動を行うに際して、指導・支援をいただいた方々に、次のような方々がいる。

鈴峯女子短期大学	松井輝昭氏
檀原考古学研究所	今津節生氏
国文学研究資料館史料館	青木睦氏
吉田町歴史民俗資料館	川尻真氏

b.救出した文化財、寺院記録資料類

大般若経	1913年勸請	600巻
金剛経	年代不詳	40巻
檀家帳、年中行事帖及び書籍類	段ボール3箱	
佛画類	涅槃図（明和元年）他	50余点
佛像（高さ30～50cm、極彩色寄木作）		26体
佛具・木版		若干

c. 応急処置を施した記録

ア. 経典

3分の2は泥を除去し風通しを行い、エタノール噴霧を施し、段ボール箱に詰め替えた。

3分の1は、カビにより固着する可能性が高く、応急処置後、冷凍倉庫に入れる準備をした。

イ. 佛画、佛掛軸、檀家帳等の資料

風通しを行い、エタノール噴霧。佛画類は、レーヨン紙相紙を施し、巻込固着を防止する保護手当てを行い、檀家帳等は、新しい段ボール箱に移した。

ウ. 佛像佛具

泥を取り除き、エタノール噴霧後、段ボール箱に2～3体ずつ入れ、乾燥による分解が生じても判別できる様にした。

鎌倉から江戸期の佛画、典籍数点は、泥砂奥深く、今回未救出のままとなり、その後の再三の雨で絶望的となった。

レスキューした文化財の保存措置

救助過程と文化財に施した応急処置について、寺・檀家側に状況説明を行い、その後の保存措置は所有者である宝持寺と檀家の最終的な方針決定後、次の措置を行うこととした。

- 1 土砂、濡れ、汚れによるカビの発生と、固着防止と修理に備え、凍結保管のため冷凍庫を確保することにした。
- 2 燻蒸は薬品会社の無料奉仕で県立文書館にて行う。
- 3 佛像、佛画は、地元資料館燻蒸室（瀬尾弘吉記念資料館）の使用が大柿町教育委員会から許可されれば、薬品会社奉仕にてカビ防虫処理を行うこととし、住職代理、檀家総代に町との連絡を依頼し、仮設倉庫に保管した。

冷凍保管のための冷凍庫は、そのほとんどが食品を取扱うので、衛生面からことごとく断られ、近場で確保ができず困っていたところ、最

新コンピューター区分管理機能を備えた運輸倉庫会社社長・田中一範氏より、今後365日いつでも受け入れてもよいとの申し出を受けた。これは、被災文化財の救済を2度にわたって取り上げていただいた中国新聞解説委員・後藤研一氏のおかげである。両氏に深く感謝申し上げたい。おわりに - 今後の課題 -

次に、今回の文化財レスキューを実施し、今後課題となった項目を記す。

- 1 今回のボランティアにおけるネットワークが安定した組織になるために、どのような取り組みが必要か、行政と民間の連携のあり方を検討しなければならない。
- 2 文化財救出の応急処置用品を、常備確保する体制を作る。
- 3 被災者への、文化財レスキューボランティア参入のタイミングをどのように考えるのか。
- 4 被災者の崩壊家屋復旧等における不安な感情を考えると、復旧時に行う文化財資料救出に対して、被災者の理解を得る最良の方法はなにか。
- 5 ボランティア参加者の被災地への往復を含めた、万一の事故や被災時の対策・準備について、いかなる対応策が必要か。
- 6 誰が、資材諸費用の負担をするのか。
- 7 平常時の研修・連携と、非常時の連絡方法の確立。

以上が、今回の活動と課題になると思われる。

なお、広島県立文書館においては、来る10月、県内市町村文書主管課、教育委員会、歴史資料保存機関対象の管理講習会において、資料レスキューネットワーク作りの討議が行われる予定となった。その他、いくつかの歴史資料館から、今後の対応を検討し活動に備えたいとの連絡が寄せられた。広島県は、全国一危険傾斜地指定の多い県であり、秋の台風シーズンを控え、機動力のあるネットワークが早期に構築されることを願うものである。

今回、資料・文物の救出活動は課題を抱えたまま、2ヶ月余りが過ぎることとなったが、この度のレスキュー活動の課題は、次回への参考資料となり、県内ネットワーク作りにつながるものと確信する。

（くぼたかし、文化財保存修復学会会員）

公害資料保存活動の報告と 今後の展望

達 脇 明 子

あおぞら財団・公害地域再生センターが、史料ネットをはじめ歴史研究者・史料保存関係者らの協力を得て取り組んでいる公害資料保存、記録化の取り組みについては、本コーナーでも何回か取り上げてきた。

あおぞら財団は、大阪を中心としつつ、全国的な大気汚染公害訴訟・反対運動も視野に入れた資料保存、記録化に取り組んでおり、その取り組みは少しずつではあるが、他の地域の取り組みをも引き出しつつある。

また、西淀川の隣の尼崎では、国・道路公団に対する大気汚染訴訟が続いているものの、企業との間では和解したのにもない、西淀川と同様に地域再生をかかげる団体「赤とんぼ」が旗揚げし、この9月には尼崎市内にセンターも開設する。ここでも、資料保存・記録化が重要な課題として位置づけられており、史料ネットや尼崎戦後史聞き取り研究会に対して協力要請がなされている。

今回は、活動報告と今後の展望について、あおぞら財団の取り組みを中心とした達脇明子氏による報告を掲載する。（編集部）

あおぞら財団の公害問題資料の保存は、1998年4月からは3年間の予定で特殊法人・公害健康被害補償予防協会の委託事業として取り組んでいる。

初年度（1998年度）の実績

初年度の仕事の中心は、図らずも公害問題の住民運動資料を保存すべき資料群として認知されるように各方面に説明、説得、訴えることであった。まず、「フツーの者には、ゴミとしか思われんもんのかたまりやで。こんなものを残すことが常識的か？」という声。「資料の山のなかで、何が重要で、何が重要でないのか。ハッキリさせないと意味がない」「一次資料を残す有効性が証明されないと残しても仕方がない」等々の意見。一次資料は残す必要があるのでという歴史学の分野ではある程度常識のこと

が、常識とは受け取られにくい状況下でとにかく西淀川住民運動関係の第1次の仮目録をつくること、理解者を増やすこと、ネットワークを少しでも広げることを中心課題にして1年目は終わった。

1998年11月15日には各運動団体関係者を中心メンバーとしてグループヒアリングを行ったが、これは複数の運動関係者と歴史家、資料保存関係者、委託元の環境庁の関係者が一同に会する初めての機会といってよいのではなかったか。

さらに、1999年1月20日には、11月の結果を受けて関西の近・現代史研究者、震災資料保存関係者、公害裁判の弁護士など17人が集まって、資料保存の具体的方策について話し合った。この場では特に、保管場所の確保が緊急・最重要課題だという確認が全員でなされた。ここに至って、ようやく公害問題資料についての認識や保存方法の検討が具体化する方向が見え始めた。

こうした1998年度の調査検討の成果として、『大気汚染対策に係る被害者・住民運動資料の保存・整理手法に関する調査研究』と題する報告書ならびに、報告書付属資料として『西淀川公害訴訟関係弁護団・住民運動資料 第1次目録』を編さん、刊行した。従来組織だって取り組まれたことのないこの分野について、各方面からの貴重な論考を得て作成したこの報告書を、ぜひ今後の事業に役立てていきたいし、他の分野での同様の取り組みにも活用したり、あるいはご批判やご意見などもいただければと思う。

1999年度の取り組みの現状と展望

事業2年目の今年度は、次のような目標を設定して動き始めている。

阪神工業地帯における被害者・住民運動資料の収集・保存・記録化に係る手法の検討

1998年度に引き続き、西淀川における患者会関係資料等の収集・保存・記録化作業を行うとともに、阪神工業地帯全体の被害者・住民運動資料も視野に入れて、包括的な大気汚染公害問題資料の収集・保存・記録化に係る

手法の具体的な検討を行う。

資料所在の把握 1998年度に引き続き、全国各地の被害者・住民（運動）団体や関連団体、有識者、自治体等に対して、資料の保存状況等に係るヒアリング及び現況調査を行い、各地の資料保存に対する関心を高め、保存活動を進めることに有効な情報の提供・交流を図る。

ネットワーク構築の推進 ネットワーク形成を進めるにあたり、専門家、被害者・住民（運動）団体関係者、行政関係者等からなる作業部会を組織して、資料保存のあり方、方法論等に係る検討及び資料保存・記録化作業の実施が可能な主体（地域住民やボランティア等）形成推進に係る研究を行う。

この目標を達成するために「公害問題資料保存研究会」を設けた。8月末現在までに、準備会を含めて3回の研究会を開き、諸課題解決のための実質的な検討を行っている。この研究会は、公開を原則としており、コアメンバーは以下のとおりである。

(五十音順、敬称略、印が代表)

奥村 弘 : 神戸大学文学部助教授

小田 康徳 : 大阪電気通信大学工学部教授

佐賀 朝 : 桃山学院大学文学部専任講師

佐々木和子 : (財)阪神・淡路大震災記念協会
職員、震災・まちのアーカイブ会員

○芝村 篤樹 : 桃山学院大学経済学部教授

辻川 敦 : 尼崎戦後史聞き取り研究会代表

津留崎直美 : 大阪西淀川大気汚染公害訴訟弁
護団事務局長

早川 光俊 : 地球環境と大気汚染を考える全
国市民会議(CASA)専務理事

原田 敬一 : 仏教大学文学部教授

なお、さきにふれた、緊急課題である資料保

管場所の確保については、7月中旬、財団が入っている三洋ビル6階の倉庫（約54㎡）を借り受けた。多少の改装を加えて、8月末に西淀川の患者会資料を搬入した。

8月27日には、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会第46回例会が、あおぞら財団地域資料室とグリーンルーム（西淀川公害患者と家族の会付属会議室）で開かれ、財団の資料保存の取り組みを紹介した。この会の会員であり、当財団の資料保存研究会のメンバーでもある佐々木和子氏に貴重なご意見を頂いたので紹介しておく。

— (当日の発言と財団機関紙『Libella

40、1999年9月号掲載コメントから)

佐々木和子氏

現在あおぞら財団が整理・保存を行っている「大気汚染公害資料」は、「記録」と「史料」の間に位置する。大気汚染公害やそれと闘った住民運動は、現代史上特筆すべき出来事であった。時代や地域を越えて引き継がれるべき教訓は多く、後世の正しい評価がまたれる。当然これらの「記録」は「史料」への移行が必要である。

こういった“「史料」になるかもしれない資料”をどこまで目録化し、どのように保存していくのか。もう一方の当事者である行政や企業の資料の「史料」化と、どう連携していくのか。今回提示された課題に取り組むためには、歴史研究者や史料保存関係者の果たすべき役割は大きい。

公害資料保存の取り組みについて、引き続き模索しながら検討と実践を重ねていきたいと思う。各方面からのご協力をお願いしたい。

(たつわきあきこ、あおぞら財団)

1998年度 (財)公害地域再生センター(あおぞら財団)発行

公害健康被害補償予防協会受託業務報告書

『大気汚染対策に係る被害者・住民運動資料の保存・整理手法に関する調査研究』

序章 / 第1章 被害者・住民運動資料の保存の意義(小山仁示氏・岡田知弘氏) /

第2章 / 被害者・住民運動における資料保存の現状と課題 / 第3章 被害者・住民運動資料の保存のために(第2節小山仁示氏) / 資料編 (A4判、109頁)

『西淀川公害訴訟関係弁護団・住民運動資料 第1次目録』

1. 西淀川公害訴訟弁護団関係資料 / 2. 西淀川公害患者と家族の会事務所資料 /

3. 芹沢芳郎氏寄贈資料 / 4. 田中千氏寄贈資料 (A4判、123頁)

戦争史跡見学・講演会 『火垂るの墓』を歩く

辻川 敦

1999年8月8日、戦争史跡見学・講演会「『火垂るの墓』を歩く」と題する企画を、同実行委員会主催、史料ネット協力により実施した。定員の2倍以上の参加申し込みがあり、多くの方の参加をお断りせざるを得なかったこの企画は、主催者の予想以上に、求められる内容のものであったと言える。その一方で反省すべき点も多く、今後活かしていく必要がある。実施の経緯と企画内容

この企画は、もともとは尼崎市立地域研究史料館が主催する「『尼崎市史』を読む会」の世話人会の場で、夏の時期に戦争遺跡を見学して学びたい、という要望から提案されたものであった。しかしながら、内容的には西宮市域の戦争遺跡の見学であり、「『尼崎市史』を読む会」の事業としてはなじまないということで、同世話人会の1人である正岡茂明氏を中心に実行委員会が作られ、史料ネットが広報や参加申し込み受付などの面で協力する形で、具体化したものである。

企画の具体的内容は次のとおり。

日時 1999年8月8日(日)午後1時～5時
コース 午後1時阪急甲陽園駅改札口集合
甲陽園地下壕見学 満池谷墓地 神原
公民館 ニテコ池 大社小学校メモリアルホール 阪急夙川駅方面
コース説明および神原公民館での説明
鄭鴻永氏(兵庫朝鮮関係研究会)
佐々木和子氏(地域史研究者)
正岡茂明氏(西宮北高等学校)
参加費200円 定員50人

広報と参加申し込み

この企画の広報については、本ニュース第17号に案内を掲載し、またチラシを作って実行委員会メンバーが周囲に配布した。さらに新聞各紙・地域情報紙などに案内を送って、広報への協力を依頼したところ、各紙が紙面を割いてこ

れにこたえてくれた。しかも、通常この種の広報記事は地方版や文化欄の催し物案内コーナーなどにごく小さく掲載されるのがふつうであるのに対して、7月末に2紙の地方版頁に数段抜きの記事として予想以上に大きく掲載されたのであった(うち1紙は見学先の写真掲載)。

この結果、参加申し込みは定員50人を大きく上回って百数十人に達した。しかしながら、見学コース中の甲陽園地下壕と、神原公民館の部屋に入れる人数にはおのずと限りがあるため、定員を越えた方についてはお断りせざるを得ず、参加できなかった方にはまことに申し訳なく思っている。参加できなかった方からは、「二度目の企画はないのか、再度こういった企画があればひと参加したい」といった声が多く聞かれた。申し込みの電話口で、ご自身の戦争体験について語られる方もあったとのことである。実施当日と反省点

実施当日は、参加者に加えて新聞各紙の記者が取材同行し、翌日の各阪神版には記事が掲載された。このため、スタッフ(講師や、『尼崎市史』を読む会のボランティアなど)を加えると、全参加者は60人以上となった。夏休みということもあって、親子連れでの参加も多かった。

さきあげたプランのとおり、まず、戦時中に強制連行された朝鮮人労働者たちによって造られた甲陽園地下壕を、鄭鴻永さんの案内により見学した。次に、満池谷墓地を経て公民館で鄭さんから再度説明を聞き、さらに佐々木和子さんから阪神地域でも最重要の軍需企業であった川西航空機について、正岡茂明さんからは満池谷周辺が野坂昭如氏の小説『火垂るの墓』の舞台であると考えられるという説明を聞いた後、公民館を出てコース見学を続けた。当日は、曇りがちとは言え蒸し暑いなか長時間歩き、また公民館でも部屋にぎっしりの状態で、参加者・スタッフともどもまことにご苦労な一日であったと思う。

暑さに加えて、多人数であるため見学中の説

明がかならずしも全員に聞き取れず、また内容そのものが参加者にとって、特に児童・生徒にとってわかりやすいものであったかどうかも反省点として残る。実行委員会のメンバーは、阪神地方の戦争の歴史について調査や学習を続ける何らかの取り組みを継続したいという意思を持っているので、今後の企画に際しては、多くの方の申し込みを断る結果となったこととあわせて、こういった反省点を教訓としていきたい。

その一方で、マスコミの反響の大きさや、参加申し込みの多さは、夏という時期に合致したこと、野坂氏の著名な小説の舞台を取り上げたこと、一般の人は見学する機会のためたにない甲陽園地下壕をコースに組み入れたことなどが、まさに市民の求める内容の企画であったことを示していると言えるであろう。筆者自身も地下壕(地下工場跡)を見学するのははじめてであったが、甲陽園付近にも多くあった地下壕のうち、原状がある程度保存されており、見学できるのはほとんどこの1か所だけであること、その壕は民家のすぐ裏手にあり、その民家所有者の方の理解と、鄭さんはじめ調査と保存に取り組む皆さんとの間の信頼関係によって見学が可能となっていることなど、学ぶところが多かった。

参加者のなかには、みずから川西航空機に勤務された方で、体験を語られる方もあった。こういった方々から聞き取りを行ない、記録していくことも必要であろう。こういったことも含めて、多くの課題を残した企画であったと思う。

(つじかわあつし、尼崎市立地域研究史料館)

『火垂るの墓』を歩く に参加して

三浦正子

図書館の新刊案内でふと目にした本。「何て読むのだろう」「火垂るの墓」「ほたる」頭の中には情景がうかんだ。読み進んでいくと、何とも言えない不思議な空想が広がってきた。アニメ化された絵を見て、また甦ってきて涙が出た。

私の“ほたる”の思い出は、小さい頃家族で夕涼みをしていると、きれいな光が家の周囲をいったりきたりして、兄が“ほたる”と叫んだ

ことだ。次の日祖父の死を知らされた。あれは“火垂る”だったんだ。

終戦から54年がすぎ、この機会にふと立ち止まって昔を思い出す。そんな時間があってもいいかなと、企画に参加させていただいた。その跡地が西宮の閑静な住宅街の中に残っているなんて、知らなかった。一步地下壕に足を踏み入れ、50年前の現実を目にすると、身体がキュッとしまるような気がして、一気に汗がひいてしまった。足下は湧き水で歩きにくい、トンネル状に奥まで続いて、天井や壁は思ったよりきれいに残っていた。多くの朝鮮人労働者の人たちが重労働に耐え忍び、終戦を知り、望郷の思いで一気に詩を詠んだのだろう。壁に墨で書かれた字がうっすらと残っていた。無事に家族の元に帰れたのだろうか、せつない思いだった。

一時のタイムカプセルから抜け、震災で一変した街並みの説明を聴きながら歩いていると、過去と現実が入り交じって、変な感じがした。二テコ池、満池谷付近は、きれいな水が流れ“ほたる”がたくさんいたのだろう。所々に小説に書かれた場所が残っていて、うれしかった。野球場の広告看板でみた「紫電改」が、川西航空機(現新明和工業)で製造された戦闘機の名前だったとは知らなかった。満池谷墓地にある、そのテストパイロットの方のお墓、大社小学校の弾痕が残る扉、屋上にあったという鉄柵の一部を見て、胸が熱くなった。地下壕の土で埋められた大池公園の一部、池の周りでは家族連れが楽しく遊んでいた。その近くには、日本も氷河期があったという証明になる地層が保存されていて、歩きながらの勉強に疲れも忘れ、説明を聴き漏らさないようにと、思わず小走りになった。なんだか得したような気分で、充実した一日だった。

参加したなかで、高齢の方はまた違った思いだったと思うし、私を含め、絵や話の中でしか戦争を知らない世代の者は、戦争の跡を実際に目にすることができ、良い体験だったと思う。戦争を過去のことと風化させないで、これらの現実をたくさんの人たちに知ってもらうため、勇気を持って語り、保存に向けて努力しておられる方がいることを知った。私も少しでも何かの役に立つことができればと思う。ありがとうございました。

(みうらまさこ、NPOソフオニ-ボランティア)

「『火垂るの墓』を歩く」は、各紙に報道されました。そのうち、毎日新聞1999年8月9日付、阪神版19面の記事を紹介します。

『歴史のなかの 神戸と平家』

- 地域再生へのメッセージ -

神戸新聞総合出版センター発行(10月発行予定)

予定価格1,800円

内容目次

はじめに - この本に込めた私たちの思い -

第1部 清盛と福原の時代

永井路子 平家物語の時代と神戸

足利健亮 清盛時代の福原と和田京

須藤 宏 地中から語る清盛の時代

高橋昌明 福原の夢 - 清盛と対外貿易 -

保立道久 神戸と方丈記の時代

第2部 神戸の地域遺産と歴史意識

坂江 渉 古代国家と清盛以前の神戸の港

藤田明良 清盛塚石塔と鎌倉時代の兵庫津

藤田明良 『入船納帳』と兵庫津の街並

森田竜雄 「関屋町」と中世の港湾管理

藤田明良 禅宗寺院と中世の国際交流

大国正美 古記録にみる近世初頭の被災と復興

大国正美 名所記にみる平家伝承の定着

奥村 弘 神戸開港と都市イメージ

- 清国人に対抗しうる都市を -

奥村 弘 みなとの祭りから神戸祭りへ

- モダンな都市神戸の成立 -

終章 地域遺産から歴史を考える

- 地域史研究への誘い -

文献リスト

本書は、1997年9月に神戸市東灘区の御影公会堂で、作家の永井路子氏を招いて開催した史料ネットによる第7回市民講座「清盛と福原京の時代 被災地神戸の歴史をふりかえる」での講演や関連報告・スライドを中心にまとめたものです。神戸の歴史像や、住民の歴史認識についての新しい視角や成果を取り入れた内容となっています。

出版関連企画(連続市民学習会)も予定しています。くわしくは本ニュース12頁をご覧ください。

文献情報

神戸史学会 『歴史と神戸』第38巻第4号(通巻215号) 1999年8月発行
特集 明石の近世・近代 - 田中家文書を中心に

明石の田中源左衛門家(明石藩大庄屋家)の文書は、震災時の被災史料レスキューによって保全され、その後史料ネットメンバーをはじめとするボランティアによって整理・目録化作業が行なわれました。

今回の特集号には、この整理作業に携わったメンバーによる、田中家文書を活用した論文4本が掲載されています。

掲載論文 石川道子 「道中みちしるべ日記」明石から日光への俳諧旅行
木村修二 伊能測量隊に提出された絵図
大国正美 明石藩大庄屋組の変遷と編成論理
義根益美 明石公園の成立と「明石公園保存会」について

『歴史と神戸』は年6回発行。年間購読料2千円。1冊単価は420円。購読申込は下記まで。
〒657-0845 神戸市灘区岩屋中町3-1-4 田中印刷内 神戸史学会 TEL078-871-0555
郵便振替口座 01190-2-4018

取り組み報告とお知らせ

震災記念協会による資料公開基準の検討

(財)阪神・淡路大震災記念協会は、1998年度から3年計画で、「震災資料の分類・公開の基準研究会」を設けて、資料の分類・公開に向けた検討を進めています。1999年度は、この研究会のもとに「公開基準検討部会」を設けて、具体的な公開基準づくりの検討を行なっています。

この検討部会は、親研究会のメンバーである芝村篤樹氏(桃山学院大学教授)がリーダーを務め、大西愛(大阪大学出版会)、奥村弘(史料ネット代表幹事)、辻川敦(尼崎市立地域研究史料館)という、いずれも史料ネット関係者であるメンバーによって構成されており、現代資料として非常に多様な内容・形態を持つ震災資料の公開基準づくりという、ほとんど前例のない課題に取り組みます。第1回の検討会が8月23日(月)に同協会にて開催され、今後年度内に数回の検討会を経て成果をまとめる予定です。

なお、阪神・淡路大震災記念協会による「阪神・淡路大震災メモリアルセンター」基本構想が、1999年3月に発表されました。同構想はメモリアルセンターを、震災体験と教訓の将来への継承、世界に向けた情報発信のための施設として位置づけており、現在協会が調査収集している震災資料を引き継いで、震災関連の公文書館的機能の一端を担うとしています。

「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」シンポジウムの開催

1999年12月4日(土)午前10時~午後4時20分、ピブレホール(神戸市長田区若松町4-2-1、JR神戸線新長田駅、地下鉄新長田駅南)において、シンポジウム実行委員会主催(事務局=兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所)により、「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」シンポジウムが開催されます。阪神・淡路大震災の経験をもとに、巨大災害時の復旧復興と埋蔵文化財調査について探ろうというもので、史料ネットはこの企画を後援しています。また、パネラーとして藤田明良事務局長と、猪名荘遺跡を学ぶ会の川本ミハルさんが出席し、それぞれの立場から発言する予定です。

参加費無料(資料代実費)。参加申し込み・問い合わせは事務局(TEL078-531-7011、FAX 078-531-7014、mail maibun-bo@hyogo-edu.yashiro.hyogo.jp)まで。

新聞記事より

「震災対策国際総合検証会議」による、震災の多角的検証作業がはじまりました。
同作業を伝える朝日新聞記事（1999年8月5日、阪神版23面）を紹介します。

よみがえる兵庫津の歴史と街なみ 震災後の発掘調査と新出史料から

連続市民学習会のお知らせ

ミナト神戸の歴史的原点ともいえる兵庫区の兵庫津地区では、震災後の発掘調査や史料保全活動のなかで、新しい遺構や史料の発見が相次いでいます。この成果を広く紹介し、21世紀にむけた地域遺産の保存活用、歴史を活かした街づくりについて、共に考えていく契機とするため、史料ネットでは連続市民学習会を開催していきます。

第1回 「中世の街並と住民たち」 1999年10月31日(日)午後2時から

場 所 フェニックスプラザ(震災復興館) 三宮駅南側(そごうの西向かい)

講 師 岡田章一氏(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所)

藤田明良氏(天理大学国際文化学部)

参 加 申し込み不要、参加料無料 展 示 兵庫津遺跡の出土遺物等

主 催 歴史資料ネットワーク 共 催 神戸史学会

今後の予定 第2回「近世の生活空間と都市災害」1999年12月12日(日)フェニックスプラザ
第3回「近代の基盤整備の光と影」2000年1月23日(日)兵庫勤労市民センター

NPOシンフォニー「講演と交流の夕べ」第2回

今回のテーマは...「まちを探検する、まちを発見する」

何気ないまちのたたずまいのなかに隠されているさまざまな歴史、私たちの住むまちのそんな歴史を、自分たち自身で探検・発見してみませんか。

今回は、そんな「街かど学」を語らせたなら天下一品の田辺真人さんをコーディネーターとして、まちの歴史の調べ方に迫る実践講座です。

日 時 1999年10月30日(土)午後3時～5時講演会 午後5時～7時ワインパーティ

場 所 園田学園女子大学(尼崎市南塚口町7-29-1、阪急塚口駅から南西徒歩12分)

コーディネーター 田辺真人氏(園田学園女子大学教授、民俗学・比較文化論)

講演(仮題)「マンガで再現する私のまち」井上眞理子氏(尼崎探訪家、イラストレーター)

「まちの歴史の調べ方、教えます」(尼崎市立地域研究史料館職員を予定)

参加費 講演会資料代500円 パーティ2,000円(ただし学生は1,000円)

主催/参加申し込み先 NPOシンフォニー(TEL06-6483-2328、FAX06-6483-2329、
e-mail symphony@green.interq.or.jp、いずれかによりお申込み下さい)

このニュースは、NIFTY-Serveの歴史フォーラム・歴史館2番会議室「地域史情報室」に、“曾根崎新地のひろ”さんに転載していただいています。
史料保存関係のホームページ「Archivist in Japan」を開設している小林年春さん
のご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに掲載していただいています。
<http://www.archivists.com/> または <http://member.nifty.ne.jp/archivists/>
または <http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/>

史料ネット NEWS LETTER No. 18

1999.9.18(土)

編集・発行 歴史資料ネットワーク 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学文学部内 TEL/FAX078-803-5565 e-mail yfujita@lit.kobe-u.ac.jp